

大学アイデンティティーの確認とアーカイブズの充実 そして沿革史の編纂

寺崎 昌 男

はじめに

皆さん、こんにちは。こんなに多数お集まりいただき、恐縮しています。

本日、私は、懐かしい思いがしております。なぜかというところ、こちらでお出しになっている『早稲田大学史記要』に、沿革史編纂に関して、これまで三回ほど書かせていただいたことがあるからです。早稲田大学とはいろんな点で、深いご縁をつくって頂いたのだと改めて感謝いたします。

実は、もう一つ感慨があります。それは、「大学アイデンティティーの確認とアーカイブズの充実として沿革史の編纂」、それにもう一つ入れると、「展示館の役割」という、いわば卍型の話を今日できるということです。今から四〇年前、私が四〇歳台の頃、こういう機会はありませんでした。今、八〇歳台になって、こういう話ができるように

なったというのは、私にとつては感慨の種であります。

何が変わったか。大学というものの社会的性格がこの間に激変したのだと思います。われわれは現象だけを追いかけます。紛争があつたとか、設置基準が大綱化されたとか、大衆化の極みまできたとか、そういうふうに見て大学の变化に驚いていますが、変化はそれだけではありません。もうちょっと違う変化があると思います。すなわち、大学の社会に対する責任、もう一つは社会の大学に対する期待、この両面の質が大きく変わってきたのです。その結果浮かび上がってきたのが、大学アイデンティティーの確認作業であり、その一つとして大学アーカイブズを充実すべきだという義務です。それらを踏まえると、沿革史を編纂するについても昔のような気持ちではできなくなりました。そしてさらに、展示館をつくったほうがいいという流れにもなってきたと思うのです。

これまで私は、沿革史の執筆・編纂という仕事に関わってまいりました。執筆と編纂両方に責任を持たされた大学が六校ほどあります。それから、文書館建設、これは提案をあちこちでしましたが、実行したのは立教学院の最後、昨年までの間の数年間に、建設に参画する機会を与えられたときでした。

その次は、学生たちに自校教育を行なうことです。これは一九九七年から立教大学で個人的に始めまして、その後、桜美林大学、獨協大学、大東文化大学というふうに、いろいろな大学の自校教育のお手伝いをしてまいりました。

最後は、沿革史の批評です。今日お見えになっております教育学部の湯川次義先生、それから、先ほどお名前が出た京都大学の西山伸先生、それと私の三人で、『学校沿革史の研究 大学編2』（公益財団法人野間教育研究所紀要第五十八集、二〇一六年）という最近出たばかりの本をつくらせてもらいました。私は、宗教学系の沿革史というテーマで、仏教、キリスト教、それから神道、この三つの大学の沿革史がどうなっているかを調べました。湯川先生は、大学の大衆化のプロセスがどのように大規模大学で受け止められて書かれているかを、また西山先生は国立大学沿革史のつ

くられ方をお調べになりました。大きく言えば、批評活動です。それをするようになりました。そういう本が出るようになったのも、まさに時代であります。

そういうわけで、今夕の講演は、私にとってみますと、いわば人生的な感動というものを覚える出来事であります。

アーカイブズの設置と充実

さて、最初に、アーカイブズの設置という目に見えるところの話から披瀝して行きたいと思います。アーカイブズの設置と充実、この課題こそ、一番大きい目に見える変化の一つではないかと思うのです。つまり「なかったものがあることになった」という変化です。

実は大学史料の大事さに私どもが気づいたのは、一九六〇年代の末ぐらいでした。紛争の最中か直前ごろに、私などはハラハラして見ておりました。この紛争のために、大学が持っている史・資料というのは全部なくなるのではないかと。当時、私は財団法人野間教育研究所という講談社が開いている研究所におりましたけれども、そこから見てハラハラしていたのです。

個人的にはいろいろな経験を持っていました。例えば、一九六四年から六五年あたりにかけて、東大の安田講堂の中に入って、昔からあるという庶務課の文書というのを見ることができました。それをほこりだらけになって見ておられます中に、ひょこりと出てきたのは、『私立法律学校関係』という二冊の簿冊だったのです。何だろうと思って開いてみたら、帝国大学ができた時代に、なんとその法科大学が、他の東京府下の五つの法律学校の教育を監督している記録でした。そういうことをしるという達しが文部大臣から帝国大学に来たということは、『東京帝国大学五十

年史』に書いてありました。しかし、実際にそのようなことが行われたのかどうか、これはどこにも書かれておらず、本当に実施されたかどうかとも分かりませんでした。ところが、二冊の簿冊を引つ張り出してみたら、それが事細かに書いてあるわけです。

ずっと読んでいくと、後の明治、中央、法政、早稲田、それに専修、その法律学校の監督がどのぐらい強烈に行われたかわかります。本当にさまざま深いまで行われているわけです。時間割、テキストブックはもろんのこと、教育の内容、試験問題、それに対する採点の状況、受け持ちの教員の名前等々がしつかり書いてあって、しかも、従来分からなかったのですが、よく読んでいくうちに、最後はその五つの法律学校の卒業生の中で成績のよかった者だけを集めて、帝国大学を会場にして試験をやっているのです。その成績の上位者は判検事予備試験を免れるということになっています。つまり、その者にだけは、帝国大学の法科大学卒業生が持っていた特権を分かち与える。これを実際やっていて、その個人別成績まで細かに書いてあるのです。

明治法律学校（明治大学）の生徒だった花井卓蔵という、後に有名な弁護士になる人がいます。あの人が何点取ったか。全受験者中の一番だったらしいのです。そういうことも全部分かりました。

私は、紛争前から、東大にはそういう史料があるということを知っていましたが、あの紛争の中でこれが消えるのは、まことにもつたいない。先生方は何とっておられるのだろうと思っていました。外部から、本当に惜しいことだと思っていました。

当時、私どもの大学アーカイブズというものについての知識は皆無に等しいものでした。いや本当に皆無でした。物入れの倉庫が東大に一つあって、その倉庫に出入りする職員の人たちがいる。見てみると、入る時はかばんを持って入っているけど、出る時にはそれにプラスして大きな紙袋も掲げて出てくるようだ。入っていつては何も持たずに

出てくる時もある。あれは通信連絡倉庫と言われている倉庫らしい。要するに、今でいうと非現用行政文書を置いておく場所だったんですね。アーカイブズってあんなものなんだろうな、と思っていました。

わずかにあった大学アーカイブズの一つが、こちらの早稲田大学でした。当時、早稲田大学の資料館が、すでに展示を続けていらっしやいました。それから、慶應義塾には福沢諭吉の研究センターがあるらしい。同志社には社史編纂所というのがありません。大学なのにどうして社史だろうかなどと思ったり、その程度の認識だったんです。ほとんど知識も経験ありませんでした。今との大きな違いです。

時は一挙に一九八〇年代に下りますが、私は今でも思い出しますけれども、一番つらかったのが、せっかく東大百年史で集めた資料を百年史が終わったら散らさなくてはいけないことでした。置いておいたらどうせ誰も面倒見ないに決まっているから、寄託されたものも全部持ち主に返さなくてはいけない。そうしない大学はどうなっているか。当時、広島大学が一つの例でした。広島大学史をおつくりになって、持っておられた文書資料を全部きちつと段ボールの箱に詰めておられたのです。ところが詰めたきり誰も面倒見ないですから、そのうちに、何がどこにあるか、ほとんど分からなくなつて、ただ箱だけがあるという状態になっていると聞いていました。

東大でも一九三二年に『東京帝国大学五十年史』、上下二巻が出ていましたけれども、その資料はどこにあるか、これも、誰も知らない。私が調べてみたら、図書館の上のほうの、五階ぐらいの誰も入らない部屋の中に積んでありました。それから医学部の図書館分館の上にもありました。医学部は一九六七年に学部百年史を出していましたから、文書資料を中央図書館から運んできていたのでしょう。しかし、リストもなければ、記録も何にもない、そういう状態でした。そういうことを見ますと、やっぱりわれわれは、当時、アーカイブズに関して、いわばまっさらな「原始時代」にいたと思います。

今はどうでしょうか。ご承知のように、一昨年まで、名古屋大学を除いて全旧帝大に文書館ができました。名古屋大学も昨年、文書館がちゃんとできて、これからは公式の大学文書館に準ずる扱いをするということになって、今、張り切っておられます。国立大学だけでも、法人化に伴って、多くの大学が頑張って文書館をつくっておられます。今は「開設」というよりもむしろ「拡大」の状態が続いているのですね。非常な変化です。私はとてもいいことだと思えます。

ところが、そこにはやっぱり問題がある。というより当事者にとっては苦衷というものがいっぱいあるのです。

一つは何かというと人員とスペースの確保という問題です。

私立大学といえども、スペースで困っておられるところがいっぱいございます。例えば、関西の某有名大学の展示室は、地下室の中にしかありません、非常に苦勞して、文書館の先生や事務員の方たちがおつくりになった施設です。行くと、貴重な史資料が、蛍光灯はついていますが、窓のない部屋に、ぎっしり陳列されています。けれども、その大学にふさわしい施設とはとても言えませんね。要するに、人員とスペースの確保というのが、あっちこっちで起きてる問題です。早稲田大学はどういうふうになさってるかということは、後でまたいろいろお聞きしたいと思います。

二番目は、学内・学外に対するアピール力の確保という課題です。

アメリカのアーカイブズを見て回って、つくづく思いました。アメリカの大学のアーカイブズ設置というのは、数字で言うと九四%から九七%ぐらいになっているらしいです。しかも短大を含めてです。短大の二種類、すなわちジュニア・カレッジとコミュニティー・カレッジを含めても、設置率は九十%に上っている。私はうそではないかと思っていました。これは、ただつくっているというだけではないのか。

ところが、行ってみて、納得しました。思い切っているところ、立ち寄ってみたのです。私は初めは西海岸の方に行ったのですけれども、そこら辺にいっぱいあるコミュニティー・カレッジとか、ジュニア・カレッジを訪ねて、「アーカイブズを見せてほしい」と頼んでみました。すると、本当にあるんですね。そして、担当の人に、「どういうことをここでやっていますか」と聞きますと、「自分たちは、コミュニティーの人たちに、例えば、カリフォルニアの半島区域、ベイ・エリアに対してこの大学はどういう貢献をしてきたかを知らせています。そのためにこれをつくっているのです」と言うんですね。あ、それならどの大学にもアーカイブズがあつて公開されているはずだ、と思いました。たくさん大学の大学が、いわば地域社会への務めとしてつくっているのです。

書いたものを読みますと、アメリカの学者たちはこういうふうに言っています。自分たちはヨーロッパの大学のアーカイブズから、二つの大事な遺産を受け継いだ。遺産の第一はマニスクリップトの保存ということだ。手で書いた手稿の保存、これが第一なんだと。それから、第二番目は、大学の所有財産の保全ということだ。この二つを受け継いだと言ってるんですね。しかし、アーカイブズがアメリカに来て、われわれが付け加えた遺産がもう一つある。それはコミュニティーに対する大学の貢献である。そのことがアーカイブズ建設のもう一つの遺産になっていると。まことにそのとおりでしたね。第三の遺産を生かして、いろいろな大学がいろいろな形のアーカイブズをつくっているわけです。

次に、先にあげましたアーカイブズの苦衷の第一と密接に絡まるのは、大学アーカイブズという組織の特性をどう考えるかという問題です。会社の文書、これもありうる。裁判所の文書、それもありうる。それから、協会とか団体、これの文書もありうる。つまり、いろいろなアーカイブズが世の中にありうるわけですが、大学のアーカイブズの持っている特性は何か。大阪大学の普真城先生の言に従うと、教育と研究に関する文書資料の保存と活用という使命を持

つことです。これ以外にはないですね。

ところが、それが特色だと思つた途端に起きる問題は何かというと、それらを漏れなく収集し、保存しておくというところにわれわれの労力は耐えられるか、という問題です。耐えられないと思います。特に研究のほう、例えば、各学部が出す紀要、そういうものの保存とその活用については、とてもアーカイブズではできない。ウェブ化した教員のアカデミック・キャリアやプロダクトなどはアーカイブズが管理しておくことができますが、それ以外の現物資料や紙資料は、各学部委ねるほかはない。あるいは、図書館と協働するほかはないというふうには、「研究と教育」と一口に言ってみても、右のようなことをやる労力は、決して簡単なものではありません。これは、大学アーカイブズが持つ深刻な苦衷です。

二番目のポイントは、これからつくっていく時に、アメリカでよく分かったのですけれど、「多様性」があつていい、ということなんです。私たちは、アーカイブズというと、一つのタイプを思い浮かべるのですけれど、それは間違いではないかと思ひます。

例えば、三つぐらいの大学のアーカイブズの特徴を当時知ることができました。

一つは、さつきも言つたように、ジュニア・カレッジでは地域との関係を特に重視して資料を集めています。これが一つです。すなわち、コミュニティへの奉仕、ないしはコミュニティとのリレーションシップ、これを重視するというアーカイブズもありうる。

他方、有名な研究大学の一つ、シカゴ大学へ行きましたら、これは全く違つて、理事会が大学をどう運営したか、それに関する記録を徹底的に集めていゝのですね。「われわれは大学のガバナンスに関する資料を重点的に集めていゝます」、こういうふうには担当の人は誇らしく言いました。現に一緒に歩いてみると、本当に、大学の理事会がどうい

う形で大学をつくってきたか、これに関する資料がしっかり保存されています。日本の場合ですと、例えば、私学でも、部長会の議事録とか理事会の議事録は学内者にも非公開などというところがあります。そういうことはシカゴ大学ではありません。一発で関係のものが出てくるのです。

私は、試しにと思って、「ジョン・デューイの書簡というのがありますか」と聞いたんです。ジョン・デューイというアメリカの新教育の先駆的教育哲学者が、一八九六年でしたか、シカゴ大学教授として附属小学校をつくって、そこを進歩的教育の先進的な事例を試す実験学校にしました。そこでの研究が、二〇世紀における世界の新教育運動、ニュー・エデュケーション・ムーブメントの起点になったのです。その関係資料があるならちよつと見たいな、と思つて、出来心のように聞いてみたんです。そうしたら、案内してくれたドクターコースの学生は、「あ、ありますよ」と、ぱつとロッカーの引き出しファイルをあけて、あつという間に私の目の前に「理事会に対するジョン・デューイの書簡」というのを出してくれました。それは、附属学校でこういう新しいエデュケーションをやってみたいという、理事会に対するジョン・デューイの請願の文書でした。あつという間に出てきたのです。

他方、ミネソタ大学は、学事、教育事項に関する資料を大事にしているというんです。「じゃあ、おたくには一九三二年の時間割も残っていますか」と聞いたたら、「あ、ありますよ」と、ただちにすつとロッカーを開いて、「あ、これはバイオロジーの学部です。バイオロジーの学部の一九三二年の時間割ですよ」とさつと見せてくれるんですね。私の勤めていた東京大学では、時間割というのは、一年たつたらもう誰も保存していません。事務局も持っていない。「あ、それは終わったものですからね」と言うんです。けれども、ミネソタ大学アーカイブズではキチンとそれを取っているわけです。「これはわがミネソタ大学の誇りだ」ということを言うんです。

そういうふうには、大学アーカイブズは、多様性といいますが、特色を持っています。

西山伸先生がお話しになったかもしれません。イギリスのグラスゴー大学のアーカイブズの人を日本に呼んで、講演をお聴きになったらしいんですけど、その時に、グラスゴーのそのアーキビストが、「いや、皆さん方、熱心なのはよく分かるけど、もつとゆつくり考えたほうがいいんじゃないですか。いろいろあつていいのですよ」と言つて帰つたというんです。私はそれを伝え聞いて、ああ、彼らはコンフォォミズム、画一主義というのは嫌いなんだな、アメリカでも確かにそうだったな、と大変興味深く思い出しました。

ですから、例えば、その大学を出た人物に関する資料はちゃんと持っているとか、特にこれこれに関する資料に関しては、うちは引けを取らないというふうなそういう特色があつていいのではないのでしょうか。私は、これから大事なことは多様性であり、それを生み出すために必要な、「ゆとり」だと思っています。

沿革史の編纂と課題

次の話題に移りたいと思います。沿革史とその編纂の問題です。

先ほど申しましたように、沿革史に関しては、最近までいろいろな大学のことを比較しながら研究を続けてまいりましたが、一つは、この四〇年の間に非常に進んできたのが歴史学の手法が入ってきたという事実です。オーソドックスな歴史学の手法と、それから叙述に関しては、主観的・情緒的な叙述ではなく、制度的に正確な、学問的な叙述を行うようになってきました。方法と叙述、この二つが浸透してきたことが第一の変化だと思います。

四〇年前はそうではありませんでした。また思い出で恐縮ですが、野間教育研究所員時代に、ある日本教育史の小さな会合に呼ばれたことがありました。そのころ私は、やっと大学沿革史が大事だということを知って、日本で

何種の沿革史が出ているかということや文献目録を作ったりして確かめていたところでしたから、張り切って行ってみたいんです。

ところが出席者は、一〇人ぐらいしかおられないんです。でも一生懸命しゃべりました。そしたら、聴いておられた年配の方が、「いやー、今日は初めて聞く話でした。あなた方がこうやって検討したり批評したりしてくださると、これからみんな本気になってやるようになりますよ」と大いに慰めて下さいました。まだ三〇代の終わりぐらいの年配でしたから、私は非常にうれしかったのを思い出します。今、その時代をはるかに越えてきたと思います。一九七〇、八〇年代ごろの大きな進歩を経て、今日があるということです。

沿革史というのは、そもそも大学の設立と歩みをどういう点で捉えるから意味があるのか、という問題があります。本当の意義は、建学の精神、社会や市場の変化、政治経済動向との関わりで設立と歩みを捉えることによって生まれてくるのだと思います。大学にも社会にも、このことの効用がだんだん分かってきたのだと思います。しかし、他方で問題もあるということです。

批評活動をやってみて分かったんですが、全体的には大いに進歩してきたけれども、一部では、まだ遅れもあるということです。改めて中身をずっと読んで比較してみると、よく分かりました。

例えば先述の共著の担当例で申しますと、宗教教団がつくった宗教系大学すなわち仏教系、キリスト教系、神道系を比較して見ていきますと、教団や教派の布教史あるいは教団組織史と大学史との区別がついてないものがあります。読んでいくと、まるで何々教団何々派の布教沿革史が大きく書かれていて、ちよこつと大学のことが出てくる。すなわち教団史、宗派史、あるいは布教史、これと大学における教育史・研究史との区別がついてない沿革史が、結構あるということがよく分かりました。

それから、特に大学紛争のように、解釈の難しい、つまり通説的な位置づけがない出来事についての書き方の問題です。これは、よく言えば、ものすごくバラエティに富んでいます。しかし、悪く言えば、いいかげんに書かれているものも、少なからずあります。非常によく書かれているものと、それから、「学生はだめだ」とめちゃくちゃに批判しているものと、いろいろありまして「ああ、これは全体として、戦後日本史における大学紛争の位置づけがまだできていないのだな」ということを改めて思わさせられました。

二番目には、学術活動を書き込むことの難しさということを感じました。早稲田大学はこれまでに、『近代日本の社会科学と早稲田大学』とか、『日本の近代文芸と早稲田大学』をちゃんとお出しになっておられます。一橋からは『一橋大学学問史』が出ています。それらは非常に例外的な大学史です。ディシプリン、学問領域の発展と大との関係に着目されたというのはいすごく大きい意味のあることで、あまり他ではない試みです。東大は非常にそれは難しいことでした。結局、三〇年前に出した『東京大学百年史』は、制度史の点では一歩進めたけれども、やっぱり大学体制史、ポデリーの歴史になった。ポデリーが何を生み出したか。この歴史を、われわれは取り上げることができませんでした。やっぱり専門が違っていると評価ができないのですね。

ただ、ドイツなどの大学史を見ても、実に大胆にこの側面が書かれてるわけです。ベルリン大学ですら、過去五〇年の間に二種類もベルリン大学の歴史がそれぞれ個人の名前を表に出して刊行されていますが、それなどを見てもみると、一つ一つの学問領域の中で、ベルリン大学がどのような役割を果たしたかが、結構書いてあるんです。

他方、イギリスの大学史、例えばオックスフォードの大学史などを読みますと、やっぱり同じように学問史と大学史の關係に踏み込んでいます。イギリスでは、大学の歴史というのはインテレクチャル・ヒストリーの一つだというようなことを言う歴史家もいます。つまり、イギリスにおける知性の歴史、あるいは、さらに日本風に言えば学問文

化史ですね、イギリス文化史あるいは、知性の歴史、これの一環が大学の歴史なんだという言い方をする人もいるくらい、大学の歴史というのはイギリスの歴史研究全体の中で大きい位置を占めているようです。

中世におけるキリスト教世界とイギリスにおける大学建設、オックスフォードやケンブリッジ等々の建設と近代における新しい宗教の革新との関係とか、そういうことが大いに踏み込んで書かれているわけです。言葉を換えると、学問や宗教というものを対象化しながら、それと大学というインスティテューションとの関係が書かれているという大きな特徴があるのです。

これはどこからくるのだろうかと思えます。日本のわれわれはきつと、知的に狭い社会に生きているのではないかと思わされます。つまり、俺の領分に入ってくることは許さないというふうに、学者同士で思っているのではないかと。だから人の領分にも入らないし、入れない。余計なことは言わないでおく、ということにもなるのです。

昔イギリスで秀れた研究をされた経済学者が、はっきりと書いておられましたけれども、日本の学者は、そういう学問の縄張り意識というものをこれまで持たされてきました。それは、これまでの研究の発展のドライブでもあった。ところが、これからはそれは許されない。互いに踏み込んででも、いろいろと言ってみる必要がある。そのところを、これから踏み越えていかなければいけないというふうに思います。われわれは、そういう点では、外国における大学沿革史の特質に大きく学ぶ必要があるだろうと思えます。

以上のことは、「沿革史が個人の責任において記される」ということを前提にした話です。しかし日本の実状は違います。集団による共通著作、そして執筆個人名は出さない、という方式でつくられます。特に概説に当たる「通史」部分はそうですね。これを前提にすると、別のアドバイスが浮かびます。

これから早稲田大学も、『百五十年史』をお作りになるということを先ほど大日方純夫先生から伺いましたが、一

つだけ、私どもの実体験を申し上げますと、「本になるまで、書いた人の著作権は認めない」ということを早めに申し合わせておくことです。それをしないでおくと、ひどい目に遭います。

特にこちらのように古い大学ですと、お年を召した權威の先生がたくさんおられると思うのです。昔はそういう先生が原稿を出されると、「わたしは命を懸けてここを改行したのだ。この節だけは一切他の者の意見は聞かない」とか言って、絶対直さない先生が出るかも知れません。これはほんとに困るんです。そういうのを見逃しますと、見てすぐ分かるほどの不統一な通史になります。人間というのは、Bの時代のベータ(β)を書こうとすると、そのBの時代に限ることができず、つい一番最初、その前のAの時代の、しかもアルファ(α)から書き始めてしまう。そして本題に入る。そんな原稿が山積みになるおそれがあるんです。それに手を入れる権限が編集委員会にはある、ということをお申し合わせておかれる必要があると思います。

東大はそれをやりました。私が委員長の時など、委員長が書いた原稿も、校訂委員会というのが三人ぐらいで顔突き合わせて、別室で修訂を受けました。私の原稿といえども真っ赤になりました。それで全体としてはよくなったんです。ダブリがなく、逸れるところがなく、そして、読みやすくなりました。もちろん誤りも正されました。

そして、もう一つは、史料編纂所の先生が、頭注というのをお書きになったんです。頭注というのは、あるまじったトピックごとに、文の上のスペースに書き込む見出しです。これは史料編纂復刻作業における非常に大事な手法なんだそうですね。史料編纂所長であった私の前の委員長の土田直鎮先生が、通史編の三卷分、全部をお引き受けになりました。頭注をつけていくと、ある時には三行で注がつく。他の所では一ページに一つしかつかない、そういうバラバラが生まれます。けれども、それは当然のことです。中味を読む目印なのですから。他方、頭注をつけられる方からは、いろいろな疑問が出てくるんですね。ここで言及されたトピックはその後一体どうなったのか、この段落は

どこがポイントか、といった質問がくるのです。それに応えて中身を変えていくと、どんどんいいものになっていく。そんなメリットが生まれました。そういう修訂の権限も、全部、編集委員会の権限として使わせていただきました。著作権を制限しておくことは、非常に大事なことです。そこをしつかりやっておかないと、バラバラの、それぞれの章節は力作だけでも、全体を読んだら統一して何が言われようとしているのか分からないという沿革史ができるのです。それは非常によくないことだと思います。

沿革史に関しては、新しい課題が二つほどあるように思います。

一つは、地域社会に対する人材供給の成果を確かめるということ。これが割におろそかになるんです。どうしてそのことを知ったかというと、つい去年、銀行出身の理事長が、立教の某学部が出された年史について感想を述べておられました。「あれを読んでみると、学部の中にどうい先生がいて、どういことをやったか、あるいは、なぜ各学科ができたかというようなことは、非常に詳しく書いてあります。つまり、学部の中がどう変化したかはよく書いてあるけれど、では卒業生たちはどこへ行ったか、それから、入学してくる学生はどの範囲で集めたか、その出身の学校や地区というのは変化したのか、しなかったのか。そういうふうなことが全く書いてありませんね。」というわけです。これは大変大事な指摘だと私は思います。

私どもは、東大の頃には前者だけはやりました。出身者の進路というのを少なくとも戦前の各チャプターに設けて、近代史の優秀な専門家が作っていきました。そうすると、出身者がどこへ行き、その後どういところで働いたかというの、おおむね分かるようになりました。あれは、もつと深めていくべき大事な課題でした。話が個人的なことになり細かくなりますので、なかなか沿革史の中にはまりきらない感じがしますけれど、頑張つてやってみると、大学のソーシャル・ファンクションないし貢献がよく分かります。

また理事長の言われた入ってくる学生たちの分析、これも大事なポイントです。どこの卒業生を大学は引き受けたかということになります。その問題を考えていくと、大学が引き受けている大切な任務に関わる大変大事なポイントになります。

次に、学部・学科の分化と再編、あるいは新学部の出現をどう捉え、叙述するかは、さつき言いました学術活動を書き込むことが難しいということとつながります。これは、これから沿革史を編纂なさる方たちは大変だろうと同情いたします。というのは、どの大学も、この二〇年間ぐらいの間に起きた学科の再編といったら大変なものだからです。新しい名前の学科・コースがどれだけできたか。文科省の統計を見ただけでも、非常によく分かります。誰も分類できないんです。総合リハビリテーション学部というのができたら、どこになるのか、昔は漫画学部でも驚いていましたけれど、今、それだけではありません。ホスピタリティー・ツーリズム学部とか、一息では言えないほどの長い題の学部ができました。

もう一つは、昔と違って、何をする学部かということが公に出てまいりました。知っている限りでは、大東文化大 学というところがおつくりになった学部は、環境創造学部でした。当時理事の一人だった私は、「環境科学部とか、あるいは、環境創造科学部とか研究院とか、そういうのにしたらどうですか。『環境創造学という学問があるのですか』と聞かれたら困るのではないですか」とさんざん心配したんですが、出してみたら、もとのままでもちゃんと通りました。さつきの総合リハビリテーション学部も、リハビリテーションをするという実践を目指す学部で、そのための諸科学をやる学部ということになります。それは特定の目的意識に基づいた総合学部、あるいは総合コースであることが、初めから宣明されているわけです。そういう種類の学部が、今、文科省の分類を見ていきますと、膨大な数に広がってきています。

何でそういうことになったのか。野田一夫という立教に務めておられた社会学者がいらつしやいます。その後、多摩大学をつくつたり、宮城県立大学をつくられたりしました。その方が桜美林大学で開いたシンポジウムで話された言葉が、私は非常に印象に残っています。どんな新しい学部をつくつて行かれたものですか、フロアから「どうしてそういう学部をおつくりになったんですか」という質問が出ました。野田さんは何と言われたかという、「昔はディシプリンがあったから学部ができたんです。今は課題があるから学部をつくるんです」と。俗な言い方をすると、私は「言えてる」と思いましたね。課題が学部を作る。

私は東大教育学部の出身ですが、こういうふうに頑張れば、戦後できた各帝大の教育学部は決して恥ずかしいと思わなくてよかつたはずですよ。

七〇年前、東大に教育学部ができたとき、周りの学部は何と言つたか。それまでせいぜい七、八〇年ぐらいの歴史しかなかった他の学部からさえも、決定的に見下げられたわけです。「何で教育学部なんか作るんだ。教育学部というのは師範学校にあつていいんじゃないか。それが東大の中にできるとは何事だ」。現に、当時、文学部を卒業して教育学部の助手になった方は、昔の文学部の頃を知っていた自分の先生から、酒の席で、「おまえ、今、どこにいるんだ」「教育学部で助手やってます」「教育学部？そんな学部はうちにあつたかな」。できてから三、四年目にそう言うて絡まれた、と言っていました。相当見下げられたのです。

それはどうしてか。教育学部は、課題に基づいてできた学部だったからです。他の学部はディシプリンに基づくか、外国のモデルに沿うか、どちらかです。これに対し、教育学部は、戦後新教育の建設という課題のためにつくられたのです。

学部というのは、そもそも既存のディシプリンや外国モデルでいくか、それとも、課題でいくか。今、私たちは大

きいところで大学づくりの分岐点にこのような気がいたします。分岐点というのは、これから新しい学部や学科は課題に沿ってつくって行かれるのだということをしっかりと認めた上で、その課題の選択を正しく見きわめ、学部・学科の変化をきちんと叙述する、これが、これからの沿革史に非常に大事な部分ではないでしょうか。それをきちつと、乱れとしてではなく、当然の流れとして叙述する、これが大事なことのように思います。

さて次の話題に移る前に、配った資料のことでちょっと説明いたします。資料の1（大学基準協会の新「大学評価システム」に列記されたアーカイブズ・沿革史関係項目）をご覧ください。アーカイブズと沿革史の関係項目が並んでおります。これは、断っておきますけれど、大学基準の項目ではありません。ですから強制力はないのですが、参考として書かれているのが、「内部質保証」の話です。その三番目にくるのが「内部質保証システムを適切に機能させているか」というトピックで、それから先が、アーカイブズと沿革史に関することになります。「内部質保証システムとして機能させているか」の中にあるのが、「教育・研究活動のデータベース化の推進」、そして「基礎データの組織的・継続的収集と管理」すなわちアーカイブズの仕事ですね。それから、「大学沿革史の編纂」、「大学文書の保存と活用」、これらが列挙されました。

これらは、さっきも言ったように、評価の項目にはなっていないから必ずしも強制力は持っていませんが、しかし、大学基準協会が二〇〇九年に行いました説明会の時に、しっかりと説明されたと聞いております。

これからアーカイブズをつくり、そして、しっかりと編纂、沿革史を出すということは、大学が内部質保証システムの一つを整備していることになるのです。つまり、大学にとって、沿革史をきちんと出すということは、物好きの仕事ではないということになりました。

自校教育という実践のひろがり

さて、資料に挙げました「自校教育に関する岩手大学教養基礎教育研究センター調査結果」から先は、自校教育の話になります。眺めながらお聴きになっていただきたいと思えます。

個人的な経験から申しますと、私が自校教育が必要だと気づいたのは、一九九七年の春でした。なぜはつきり覚えているかというと、それがちょうど立教全学共通カリキュラムの全面实施の時だったからです。私は「その中で一科目だけ持たせて下さい」と言っていて、総合科目の一つを持たせてもらいました。題は、「思想の現代的状況」という恐ろしく大きな題だったんですけれど、自身は、その中に好きなテーマを立てて一科目開けばいいと言われて、「では、大学論というのをやりますよ」と言っていて、「大学論を読む」という科目にしたんです。「それを半年間二単位でやってみる」と言っていて開きました。

そうしたら、学生が四五人来ました。ちょうどいい大きさです。私はほっとしながら、さて看板通り「大学論を読む」というのをやってみようと思っただんですが、全然、読むなんてことはできないですね。四五人のうち半数が一年生、四分の一が二年生、そのほかが三年生と四年生。これだけいるわけです。「南原繁って知ってる？」と言ったら、全然分からない。「上原専祿は？」と言っても、誰も知りません。私は最初、カントの大学論とか、そういうのを読んでみようかなんて思ってたんですけど、とんでもない。カントやアダム・スミス、とんでもないことになる。シュライエルマツヘルなんて、「人の名前？」というぐらいです。分からない。

結局、「では私がしゃべる」と言っていて、話しました。開講序論の一時間目を別として、二時間話しました。

第一、二週目は、「なぜ今の大学が生まれたか」ということで、戦後改革の話を行いました。それは、みんな割によく分かったと見えて、よく聴いてくれたんです。でも話をしてるうちに、だんだんむなしくなってきたんです。今、自分はここに立って、この学生たちと出会って大学のことをこれだけしゃべっている。学生たちは、一年生をはじめとして、ついこの間入試に受かったり偶然に選択したりしてここに座っている。私はそこに出てきた見も知らぬおやじなんです。彼らはそこに座って、たまたまこの講義を取ってそこに座っている。この出会いは単なる偶然の出会いということで、それで終わっていいだろうか。今、大学のことをしゃべっているのだけれど、われわれが一番具体的に知ってるのは、この大学ではないだろうか。つまり、立教大学のことをしゃべらなくていいだろうか。だんだん私は考え始めたんです。

それで、ふっと気がついて、そうだ、四時間目から、ちょっと別のことをしゃべろう、この大学のことをしゃべろうと思いはじめました。それで、三時間目の終わりの時に、黒板に「立教大学を考える」と書いて、「来週から二時間、二回、これをやる。こういう題でやるから、皆さん、そのつもりでいるように。シラバスにはそんなこと何にも書いてないけど、シラバス違反をやります」、こう言って、四時間目からその話を始めたわけです。

ちょうどその時期は、『立教学院百二十五年史』という史料集が出た直後でした。ですから非常によかったんです。一番いい史料が、コピーすればすぐ学生の手へ渡せたのです。始めてみました。明治七年、わずかに五人か七人ぐらいの生徒が集まって、築地の立教学校というところで英語の勉強を始めた。それが一番最初だというような話から始めて、ずっと、ポイントだけしゃべって、二回終わったんです。

その間の反響が私には忘れられません。「これまで、私は、明治学院と青山学院と立教学院の区別が何もつきませんでした。先生の話のおかげで、この三校の違いがよく分かりました。その三つは、訓令十二号事件という、明治三

十二年のあの事件に関する対応が全然違うんですね。それは、一つ一つの学校の歴史と教派の信仰の違いによるものだ。そういうことがよく分かりました。私は国際法学科の二年生です。教室に帰って、みんなに自慢してやりたいぐらいです、「こう書いてくる張り切った女子学生が出てきたり、「先生の話で、英語の立教などという時代があったという」ことを初めて知りました。今の立教の英語を見てると、とても信じられません」と書いた社会学科二年生とか、何人もいました。そういう反響がいっぱい来るんですよ。

私は自信を得ました。「いっぱい来る」と申ししたのは、書けと言ったわけではなくて、小さい、名刺ぐらいの大きさの出席票の裏に、ぎっしり書いてくるのです。進んで書き始めたんですね。私は元気づいて、後半の学期に文学部で頼まれた「総合講義」という科目では、半年間何をしゃべってもいいんですが、よし、今度はもうちょっとあのテーマを伸ばそうと思って、三回に拡大し、紛争の時立教はどういう対応をしたかということも含めて、さらに詳しくしゃべったんです。

そしたら、今度は違う反響が来るのです。「私は何々学科の四年生です。もうすぐ卒業いたします。企業も内定しました。しかし、私は四年間、この大学が嫌いで嫌いでたまりませんでした。非常に嫌いでした。しかし、先生のお話を聴いて、いっぺんで好きになりました。こういう経験を卒業間際に与えてくださって、大変感謝しております」などという女子学生の意見が来るんです。それまで受けたこともない感想でした。

私はこういう反響を見ていて、非常によく分かってきました。それは、私の話は彼らを満足させたのではない、ということ。満足は飢餓感から生まれます。飢餓感を前提にして満足というのが生まれるのですが、彼らは、飢餓感を持っていたわけではないのです。明治学院と青山学院と立教の違いは何か、本当に知りたいなんて思っているわけでも何でもないんです。その中で立教に入ってきて、ただ、どうしようかなと思っただけです。そこへ、立教の

特色をめぐる話を聞いた。聞いたことで、彼らは満足したんじゃないかと、安堵したんだと思います。なぜ安堵できるかというと、自分の位置が分かったからです。自分はどこにいるかということが分かった。そういう安堵感だと思います。これは、自校教育が与える最高の効果だと思っています。

本当に彼らは大学のことを知りません。従ってどうして入ってきたかというのも分かりません。立教の場合ですと、「本当はどこに行きたかったの?」と聞くと、男の子の半分ぐらいが「早稲田です」と言います。こちらは、最強のライバルというのではなくて、とてもかなわぬ恋敵というか、こちらへ来たかった、とみんな言っています。女子の場合はそれほど多くありません。立教は就職率もいいし、いい大学だと思っっているようで、それほどがっかりはしないようです。しかし、男の子の場合は多くがそうですよ。

これは早稲田と立教の話ですけど、考えてみると日本中の大学がそうなんです。ですから、日本の大学には、私の目から見ると、不本意入学者があふれているのです。それがどういうふうにして本意入学者になるか、あるいは、この大学にいてよかった、と思うようになるか。それは大課題です。答えは、自校のことを知ることしかないと思います。それをやると、学生たちは安心します。これは大きい問題で、今、中教審が高大連携の問題とか、あるいは中・高・大連携などと言ってますけれど、実は、本当に連携させるのは、お互いをはっきり知らせることはないかと思うのです。

私の知っておりますアメリカにおける高校から大学への進み方、これは全く違いますね。学生、高校生たちは、自分の行きたい学校を徹底的に調べて、その大学が求めている人材というのは何で、そこへ行くにはどういうことが必要かということを具体的に知って、行きます。あの大学に行くにはボランティアの経験が必ず必要だと知ったら、ボランティアをそのつもりでやります。それから、一般教養書を読んでおく必要がある。特に、例えば、工学系の方へ

進みたい者に関しては、人文系の教養書をうんと読んでおく必要がある。こういうことを、全部知るんですね。

それをどこで知るかというと、大学のアドミッション・オフィスです。そこへたびたび連絡を取って知るわけです。非常によく知って、そして、一方で、全国規模のSATとか、ああいう全国共通適性試験がありますが、あれを共通に受けて、その後、個別大学の入試を面接を中心に受けて、そして、個別大学に入っていくことになるわけです。日本式の入試問題集というふうなのは、ほとんど彼らはいらさないようですね。私は甥がそういうふうに着きましたので、目の当たりに見ました。彼らは問題集などというのを高三になってやりません。全然、持つてないです。その代わり、行きたいと思う大学の事情は非常によく知っております。日本と大違いです。

また、私は東大教育学部附属の中・高校の校長を三年間やりました。その間、生徒たちを見ていて、ほんとにもつたいたいと思いました。どういうことかという、「進路指導」という任務が、一、二人の先生の仕事になっているんです。その先生方はベテランだから、ずっと進路指導に当たっている。大学のこともいろいろ知っておられる。けれども、その先生方にしか生徒たちは相談に行かない仕組みになっているんですね。

ところが、一般の教科の先生方は、話を聞いてみると、埼玉大学の理学部の出身、名古屋大学理学部の出身、それから、東京理科大学の数学の出身、そういうふうにおなじ教科の中でもいろんな大学から見えています。国語だったら、いろいろな大学の大学院から来ておられる。その先生たちに聞いてみれば、全部、卒業された大学の特徴が分かるわけです。そういう方を生徒たちがちっとも使おうとしないし、先生のほうも使われようと思っておられない。全部、進路指導担当の先生方だけの仕事になっている。これほどもつたいたいことはないと思えました。そういうことから変えていくほかはないでしょう。私の校長時代にはそこまでは手が回りませんでした。

さて、自校教育の目的の問題に戻ります。

時々、自校教育は愛校心を高めるためにやるとおっしゃる方があります。また、そういうふうにして実施されているところもあります。私はちょっと納得できません。愛校心を養うんだつたら、自校教育なんてまどろっこしいと思います。一回神宮球場に連れていったほうがいい。六大学野球を見る。これが愛校心を高める一番いいやり方です。先ほども言ったように、自分の発見、特に再発見というのが最大の効果ではないかと思えます。自校教育を受けますと、この大学が昨日今日できたのではなくて、百年、百何十年の歴史を持つて今ここにあるということが学生には分かるんです。図書館の蔵書でも、突然買入れたのではなく、実は先輩たちが、いろいろ工夫をして揃えた結果が今自分の目の前にあるのだと分かる。また今何々学部があつて、それは大変ブランドも高くていいようだけれど、それだつて、いろいろ先生たちが苦労して出来ているのだ、というようなことが分かるのです。

事務局の特徴はどこにあるか。立教の場合ですと、学生たちが時々言うのは、普段はちよつと冷たいけど、聞いたことにはよく答えてくれる親切な人が多い。それは、いつからできたのか、なぜ出てきたかとか、こういうことも分かってきます。そういう自校のいいことが分かってくるというのは大きなよるこびです。この感動、愛校心ではなくて、再発見と安堵感、これが大事なことだと思えます。

この再発見があるから、落ち着いて、ここで勉強しようという気持ちになるんです。この図書館をしつかり使いたいとか、大学院に行つてみようとかいろんなことを考えてくれるようになります。先ほど申しました、わずか二週間、二回だけやった講義の影響を受けて、大学院まで進んだという学生のことを聞いたことがあります。残念ながら面会でできなかったんですけれども、「私は一年生の時に、寺崎という先生の授業を聴いて、ここで安心して勉強する気になつて大学院に来ました」と、こういうふうには第三者の人に話したそうです。第三者から私に話が来ました。で、「ああ、会つてみたい」と思つたんですけれど、恥ずかしいから名前を言わないでほしいと言われたというのでやめ

ました。でも、そういう落ち着き方があるのです。

彼らは、例えば、自分は偏差値のおかげで張りつけられてここにいる、こう思っている場合も多いですから、そうじゃないということが分かったら、大きい財産になっていくと思います。

ディスクロージャーの大切さ

自校教育に関して最後に申したいのは、裏も表もない授業、これが大事だということです。しゃべっていますと、ついつい、いいことだけをしゃべりたくなるんです。愛校心目的の授業だとすると、なおさら輝かしい伝統ばかりしゃべりたくなる。それはいけませんね。学生たちには裏も表もしゃべる必要があります。私は立教でそれを心掛けました。あらゆることをしゃべりました。

特に、セクハラ歴史などもしつかりしゃべりました。そんなことをしゃべると「この学校やめた」という学生が出てくるかもしれないと思ったのですが、違います。みんな目を皿のようにして聴いてました。そして、「あ、分かった。そういうこともあったんですね」という反応で、やめるといふ学生は一人もいませんでした。

それから、戦後、立教は突然、占領軍の指令によって、一一名の首脳部がパージされました。それも一九四五年の十月という、公職追放も教職追放もまだ行われてない時に、首脳部がパージされたのです。本来に、異教審判に近いような裁きでした。その事件についても全部しゃべりました。どうしてそういうことが起きたか、前提として戦時下に何があったか、立教の中でどういうことが行われたか、それらを隠すことなくしゃべりました。こうしてセクハラ歴史も、戦時下のあやまちも、いろんなことをしゃべったのですが、それによって学生たちは安心してくれました。

何故しゃべる気になったかといいますと、大学理念の歴史を知っていたからです。ドイツの観念によると、授業時間の中でしゃべることは真理でなければならぬが、あることがしゃべるに値する真理であるかないか、それを決めるのは授業者その人です。すなわち、プロフェッサーそのものなんです。またそれをどこまでしゃべるかもプロフェッサーの権限の範囲内なんですね。これは「教授の自由」として位置づけられている近代大学の理念でした。この「教授の自由」と学生における「学習の自由」、この二つの観念がドイツ大学論の基本です。

そういう点を考えて、私は何をしゃべってもいいのだと、あの時判断いたしました。何でもしゃべっておこう。その判断が、結果において、学生たちに受けたわけです。学生たちもそれを望んでいるのです。英語で言えばディスクリージャーを望んでいます。暴露するという意味ではなく、教員が真実を語る、そして自分たちがそれを知ること、それを彼らは望んでいます。真実を聞くと、先ほど申したように、安堵するわけです。裏も表もない授業というのが、求められます。

それが実現できるかどうかについては、アーカイブズの設置が極めて重要な前提です。その前提がなければ、真実はしゃべれません。

資料の2番をごらんください。自校教育に関する岩手大学教養基礎教育研究センターの調査結果です。もう八年前のデータになりますが、全国調査の一つです。これで見ますと、ごらんのように、非常にたくさんさんの大学が自校教育を実施しています。

ただし、目的はちよつとずつ違います。国立の場合ですと、上位三つの項目です。一つは、「自校の現況の理解」です。国立の場合、特に学部の違いが私立に比べてすごく大きいのです。東大にいたのでよく分かりますけど、他学部のことなど学生にとつてもやっぱりよそごとなんです。それをどうやって分からせるか。二番目は、「自校史沿革

の理解」、そして三番目が、「自学の理念・使命・目的の周知」です。国立はこの三つになっています。

公立は、「大学が立地する地域の理解」、これが第一位にきています。それから「大学の理念、使命、目的」、そして最後が「専門教育の一環としても大事なこと」だと。

私学はやっぱ「自学の理念・使命・目的の周知」、これが重視されています。これらは、私学の場合、非常に大事なことです。絶えずアイデンティティーを確認する必要があるからです。それから、「学校史、自校史沿革の理解」、次いで「大学に対する帰属意識の涵養」が来ます。この最後の帰属意識の部分、これを通り一遍に理解すると、いいことだけをしゃべりたくなるということになります。そうではなくて、ここそ実はディスクロージャーが必要な部分なんです。

資料の3（自校教育授業の内容）をごらんください。私が特に注目したのは、何といつても、「建学の精神」と「沿革・歴史」との二つが、不可分の形で重視されているということです。この両者は分かちがたいものであります。

他に、同窓会の組織的勧誘については、これもはつきりした数字が出ておりました、授業実践に関して、同窓会が企画する例もあります。一番有名なのは一橋大学です。一橋と言えば学生たちはよく知って入ってくるだろうと思っただけでもさうでもないようだ、ということに気付いた如水会という卒業生組織がお金を出して、寄付講座の形で「一橋大学の歴史」というのを開いているのです。そうしなければ見えてはられない、後輩たちが何も知らないでは困る、というふうな卒業生たちが奮起されたようです。自校史教育においては、同窓会が自校史授業の企画・運営に参加するということが大いにあります。

これと並ぶのは、職員です。職員の方の企画・運営参加という例もいっぱいあります。職員は非常に大事な役割を果たします。例えば、「うちの大学の卒業生は企業からどう評価されているか」などということを知っているのは、

教員ではありません。事務の人です。あるいは、何が足りないと思われるか、それを知っているのもやはり事務の方です。そういう点では、教授団の占める領域をはるかに超える課題への答えを沢山期待できると思います。

資料の4（広島大学自校教育「広島大学の歴史」シラバス）は、一番よく歴史に関して整っているかと思われるものです。二〇一一年のものでですから今ちよつと変わつてるかもしれませんが。お書きになったのは、小宮山道夫さんという方です。今日この席においでになりましたが、「ちよつと自分は今日、自校教育の時間が当たっております」とご連絡がありました。その代わり、私にいろいろな資料を送ってくださいました。それで、私はこれだけ書けました。

見ますと、徹底的に広島大学の歴史がベースになっております。ここに聴講生数が載っていませんけれど、たしか四百人が五百人ぐらいいるのです。大講義です。最初は四、五〇人で始めて、今やそれだけのものになったと聞きます。

小宮山さんの資料を読んで、びっくりした事実が二つあります。一つは、その聴講生人数の多さです。初めは少ないのに、だんだん多くなっている。二番目は聴講動機です。よく調べてありました。私は、定めしこれにはどうせ裏のガイドブックがあつて、「楽勝科目だから取つておけよ」というようなことになって増えたんじゃないか、と思つたんですけど、違いますね。動機を読むと、圧倒的に多いのは、「広大生になったから」というのです。「広大生になったから」というのは「なったが、何にも知らないから」ということなのです。本当によく知らないみたいです。広島大学と言えば、中国地方で高校生が一番行きたがる大学の一つです。けれども、やっぱりよく知ってはいないのです。

受講学生の感想というのもよく調べてあるんですけど、「広島大学について知らなかったことを私は知ることがで

きたから、この科目はよかった」とか、「今まで何も分からずにただ通っていました。これでよく分かりました」「広大の歴史は、旧帝大のようになろうとする歴史であることがはつきり分かったから、非常に認識が変わりました」とか、いろんなことを学生たちは学んでいます。そういうように大きく認識が変わったという学生が八二%も出てきているそうです。これは大きい効果ですね。逆の言葉で言うと、学生たちは何も知らずに入ってきているということになるわけです。

何も知らずにということの例をもう一つ申します。

私は九州の福岡県の生まれです。私のいた高校の進路指導の最高の目標は、九州大学に何人入れるかでした。古い県立高校でしたから、特に、九大に何人入ったか、修猷館は何人で、福岡高校は何人で、うちは何人か。こういう競争です。先生たちも生徒もちろん九大はあこがれの大学でした。しかし、その九大に関して、入ってきた学生が何かを知っているかという、最近の九大がなさった自校調査の学生感想文を読むと、読むのをやめられないぐらい面白いです。「何のために入ったかと聞かれています。忘れてないことを証明したいために入りました」とか、そういうのがいっぱいあるわけです。「私はまじめな学生であることを人に知らせたかったから」とかもあります。

それからもう一つは、九州大学は福岡高等学校という旧制高校を併合して出来た旧帝大です。その福岡高等学校のことを知らせたくて、先生方が自校教育の中でフィルムを流しているんです。「瀬戸内少年野球団」でしたか、その映画の中に旧制高校が出てくるのです。それで旧制高校のことを知った男の学生は、こう書いてました。「旧制高校はよかった、よかったと、祖父や父から何べんも聞きましたが、私は、旧制高校というのは、旧姓佐藤とか旧姓田中というあの旧姓だと思っていました。たんに昔の高校のことだと思っていました。でも全然違う高校だったんですね。びっくりしました。」とか書いてあるのです。

最後の資料5（自校史教育関係文献一覽）というのは自校施設関係の文献一覽で、これはまだ全く完全なものではありません。他にいっぱいあると思います。先ほど申した湯川次義先生の研究も発表されておりますけれども、いろいろな形で、今、実践のありようが交流されている領域であります。

違う角度から見てもみましょう。初年次教育と言われる部分は、アメリカで非常に重視されているようですが、なぜ重視されているかというと、完全に経営的な配慮によるんだそうです。つまり、アメリカの学生たちは、二年生・三年生になる時に、どんどんよその大学へ移動する。この移動を防ぐために、言葉を換えると、リテンション・レイシオといわれる卒業比率を高めるために、どうしても最初の入門時教育が必要なんだそうです。

しかしその一環に例えば、自校教育があるかというと、ありません。アメリカの場合、必要がないんです。さつきも言ったように、入る場合に、学生たち、よく調べて知ってますから、改めて自校教育をやる必要がないんですね。

そういう点で、自校教育の問題というのは、押し詰めていきますと、公教育体制全体の在り方がどうなっているかを語る一側面であると思います。特に生徒たちにとってみてどうであるかということです。私は、学生諸君に立教を講義したあとの一九九八年に、「学生諸君に「立教」を講義して」（『大学教育研究フォーラム』第二号）という授業報告を発表いたしました。その時に、「遺言です」とことわって、「こんな科目はぜひ置いてほしい」と書いておきました。やってみた感想として、非常に大事な科目であるというのが一つ。第二番目は、一人でやるには重すぎる。一人で半年やるというのは、相当な力量が要ると思いますね。数人で協力してやる必要があると思いました。しかし、それをやったら、やったかがあるということも、当時、非常によく分かりました。

おわりに

以上で、本日申し上げたかったことは全部終わりましたけれど、最後に、結びに代えて、問題提起の提言をいたしたいと思います。

一つは、作品としての沿革史を読みますと、大学のファカルティメンバーの総合的な力量がもろに反映されるといふことです。これは正直なものだと思います。歴史関係のファカルティが強いつい大学の歴史は、やはり非常に正確です。焦点がはつきりします。他方、いろいろ優秀な方もいらつしやるけど、何となくまとまってないという大学の沿革史は、やっぱりまとまりが悪いですね。これも非常に正直に出ます。その点ではとても恐ろしい「作品」だな、と思います。

二番目。アーカイブズは本格的な自校史教育の基盤になりうる、ということ。そして、アーカイブズは、その大学独特のものであっていいのではないか、肩肘張って同じようなものをつくることはない、ということですね。それぞれ、独特のものであっていい。

三番目、展示館。これは、実感を持って今言えるんですけれども、「つくるプロセスの持つ求心力」と「つくってからのPR力と」に注目すべきです。

つくっていくプロセスについていうと、本格的なものをつくる努力をすればするほど、求心力が高まってくるのですよ。びっくりしました。立教で三年前に企画し去年展示館を開いたのですが、その途上で、校友会にアピールをしたんですね。「こういうものをつくりたい。ついでには、何か寄贈していただけるような資料があったら、お寄せくだ

さい」と。本当にたくさん申し出があったんです。

聞いてみると、「いいでしょうか、こんなもので」とおっしゃるんですけど、ある年の野球部の予算のメモ、それから、試合の経過のノート。だいぶ昔の昭和三〇年代のもので、本人は、「いいでしょうか、こんなもの」とおっしゃるけど、「いや、それは大事です。いただきます」と有難く頂戴しました。

授業料の督促状みたいなのだって、すごく大事なんですよ。「それをもらって、今でも捨てないであって、実は恥ずかしいから子供に見せてないんですけど」とおっしゃるから、「ぜひ、下さい」。そうすると、そこにはちゃんと、当時の授業料の値段と、どういうふうに督促されていたか、滞納のときにはどういう懲罰があるかといったことが、非常によく分かります。

そういう点で、展示館は、つくるプロセスの中で、「資料の必要」ということを介して求心力が生まれます。

それから、つくってからのPR力。これは大きいです。私どものところで、一年間に一万三千人の展覧入場者がありました。私は、月に百人観覧者があって、年間一、三〇〇人なら何とか申請が立つと思っていました。それもなくなつたときは、いくら金をかけて作った館でも閉館になるかなと思っていたのですけれど、とんでもありません。一万三千人は驚きでした。

私どもが心掛けたのは、自校教育です。自校教育の場にしてほしい。特に、小・中・高校、ここの自校教育の場にしてほしい。小・中・高校の生徒たち、およびその父母の方たちに、展示館を活用していただけないか。もう一つは、校友会。卒業生、ホームカミングデー等の行事の中に、展示館の見学を入れていただくこともお願いしたい。

最後は、地域です。池袋地域のいろいろな会合、あるいは、池袋地域を歩くというようなイベントの中に、「立教を訪ねる」というのを入れてもらうことも歓迎です。その中に展示館が入ります。こういうのは、確実な観覧者を増

やすと同時に、思いもかけない大学の展示になるのです。PR効果の大きさに、私はびっくりいたしております。

要するに、展示館というのは、大学の、今日のテーマで言いますと、アイデンティティーを確認し効果的にPR成果を生む重要な拠点の一つになるだろうと思います。

今日は、三つの課題、そこに展示館のことが一つ加わったから四つですね、四つの課題について、知ってることを全部しゃべりました。もうこれで、私の中には何も残っておりません。全部しゃべらせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

※ 本稿は、二〇一六年六月八日開催の第二回早稲田大学大学史セミナーにおける講演の記録である。